

会 議 録

- 1 名 称 第3回北九州市行財政改革推進懇話会
- 2 議 題 等 議事(1)「北九州市公共施設マネジメント実行計画(素案)」について
- 3 開催日時 平成27年12月25日(金) 16時00分～17時30分
- 4 開催場所 北九州市役所庁舎5階 特別会議室A
- 5 出席した者(構成員)の氏名
齋藤 貞之 藤田 和子 原田 美紀
羽田野 隆士 福島 昭一 高鍋 優子
- 6 経 過 (構成員発言内容)

- 実行計画(素案)の「はじめに」の部分の内容と、第2章の基本的な考え方の内容が少し違うように感じる。

「はじめに」のところは、どちらかという物理的な問題点として投資的経費の問題があり、これだと安全・安心を確保することができないという展開になっている。

しかし、5ページの「基本的な考え方」では、「公共施設マネジメントは、市民の安全・安心を確保し、子どもや孫の世代が安心して暮らせる地域社会を築いていくため、真に必要な公共施設を安全に保有し続けることができる運営体制を確立」することが目的だと書いている。

要するに、「はじめに」の部分はネガティブなところから始まって、だから公共施設マネジメントが必要だという内容になっているが、2章の基本的な方針としては、割とポジティブなところから入っている。

こちらの「基本的な考え方」のほうをもう少し踏襲して、「はじめに」のところの入り口を、ネガティブなところよりも、どちらかというポジティブなところから入ったほうがよい。

- パブリックコメントをみると、市民の理解がどの程度進んでいるのか疑問を感じる。

市民目線に立って、施設をどのようにマネジメントしていくつもりなのかという市の姿勢を、はっきり分かるようにしたらよい。

- ある程度頑張っても人口減は避けて通れないという問題を踏まえると、今から何十年先の北九州市のまちづくりが目指すべきものは、コンパクトシティである。

コンパクトシティを目指すことによって、分散している公共施設も当然見直しがある。それによって、人口減の中でもコンパクトシティを実現することによって、まちなぎわいとか、住みやすいまちを目指すということが基本となる。

だから、現在分散して住んでいるところからコンパクトシティ化することによって、もっともっと光り輝くまちに変わるのですよと。分散している施設を集約するという

ことですよと。

そういう将来ビジョンがあって、たまたま本市では、50年くらいたって老朽化している施設が多いので、いわゆる分散型からコンパクトシティへ移行する中で公共施設を見直すというのが一番の視点だろう。

問題は、各論になったときに、例えば柔剣道場を例に取っても、今、子どもたちが通いやすい、行きやすい所にあるものが、それを集約するということは、それを利用して親御さんとか子どもにとっては確実に生活しにくくなるわけである。そのため、それを納得してもらわないといけないのだけど、これは非常に難しい。

その中で、有効活用で、今ある施設を従来どおり使えるように改変するとか、そういうことをやらないと、なかなか難しいだろう。

1人当たりの維持管理コスト単価が高いとか、平米数が大きいという問題ではなくて、文化としてこういう柔道とか剣道があり、数の論理で切り捨てられてしまうというふうを受け止められる可能性があるのも、今から十分考える必要がある。

その代替措置として、例えばスポーツ施設でいえば、今学校が使っている体育館とか、そういうところの利用が保障されるのですよという安心感がないと、市民の納得は得られないのではないかなという感じがする。

- 公共施設マネジメントを進めるにあたっては、どうしても「何パーセント削減」というのが出るが、問題は、とにかく削減したら済むというのではなくて、不便になった場合、それに対する代替機能がどういう形でフォローできるかということについてある程度方向性を出さないと、市民は納得できない。

焦点は「選択と集中」である。「選択と集中」と言うからには、まちづくりの視点が生かされるべきである。まちづくりの視点に基づく「選択と集中」、この戦略はどのように考えているのか。

《市》 都市のまちづくりのベースとなるものとして、都市計画のマスタープランがある。そういったものの中に、各地域、各都市にどういう機能を持たせるべきかという視点はベースとしてある。

それをさらに一歩進めるという考え方になる。

- まちづくりの視点が、今回の素案全体を通して見えてくる形になっているかどうか。今まで利用できた施設が減少すると、当初に比べて利便性は悪くなる。その現状を我慢するのは何のためかという何かがない限りは、いろいろ反対意見が出てくるのは仕方がないのかも知れない。

- 北九州市は、5市が合併して出来上がったところに特徴がある。そのため、量で見れば、公共施設は非常に充実しているように見えるけれども、北九州全体として考えてみた場合に、果たして質はどうなのかというと、非常に問題点がある。施設は各区にそれぞれたくさんあるけれども、ではこの北九州市の1つのまちづくりとしてどうなのかというと、そういった視点に欠けている。

その意味で、「選択と集中」の問題も含めて、まちづくりということで考えていけば、都市として見える姿は、質的な要素において問題が大きい。今までは、とにかく量さえ満たせばいいというところだったのが、社会はそうでなくなっている。やはり、そういった視点を入れながら、今後の取組みを展開したほうがいい。

- 概要版の10ページの「耐用年限までに集約」というところが少し気になっている。これは耐用年数まで施設を利用し続けるということか。

運営コストと建物の減価償却費とを比較して、はるかに運営コストがかかっているのであれば、簿価が残っていたとしても、それは早く壊すこともあると思う。

すごく運営コストがかかっているのであれば、もう少し運営しやすいようなことを考えてもいいのではないか。

《市》 耐用年数の表現については、「耐用年限までに集約」ということで、耐用年限を到達点にしているわけではなくて、少なくとも耐用年限までという気持ちでこの表現をしているところである。

- これを長いスパンで見たときに、例えば税収が将来的に増えてきたりしたら、これはまた見直すということになるのか。

《市》 一般的な実行計画は5年とかで確定させてしまい、実施する項目をしっかりと取り組むという話になるが、公共施設マネジメントの場合は、向こう40年という長期的な枠組で考えており、やはりその時々、財政状況の変化、ライフスタイルの変化、もろもろの社会情勢を見ながら、常に変化させていくような計画として捉えざるを得ないのだろうと考えている。

一方で、全て先送りにしてしまうと議論もできないので、今現在の考え方をまず提示して、これに対して意見を聞く。そういうことを繰り返しながらやっていく必要がある。

- 今まで公共施設の問題だったら各部局ごとに、住宅だったら住宅とか、公園だったら公園だとかやっていた。

そして、それをトータルでどうなのかは議論できなかったのだが、「公共施設マネジメント」というのは、公共施設全体をどのようにして戦略的に運用し、「選択と集中」に基づきながら構造変換させていくのか。

それには何かというと、全体を取り扱う場合のマネジメント的な視点が必要なのだと。それが、もう少し表に出る形で説明したほうがいいのではないか。

今までの発想とは違った形で公共施設を捉え直さなくてはいけない。それが、実は質的な向上につながるのだというのを今回の計画の中に盛り込んだほうがいい。

市民も「公共施設マネジメント」という言葉を聞いて「何だ、この言葉は」と、分かりにくいと思う。

だから、公共施設を取り扱う場合のマネジメント的な視点、今までなかったトータルの視点、そういった視点というのを説明したほうがいい。

- 例えば弓道場でいえば、大学や高校にもある。授業時間以外は利用していない。そういう市の施設以外の活用というか、その辺りも少し考慮できるといい。

《市》 市としても、基本的な考え方に「民間施設のノウハウの活用」というものを挙げているのは、まさにその通りで、市営住宅もそうだが、行政が全部そろえていくことが難しくなるのであれば、同じような施設を保有している民間や大学、小・中・高の学校含め、時間帯によって開放していただく。

コストをかけずに市民みんなで使えるような仕組みなどによって、解決していく。そういったアプローチが必要だと考えている。

- こういった計画は、市民にどういうふうにな得する形で説明できるかというのが中心。とりわけ、公共施設は、市民が日常的に使う問題なので、市民にわかりやすく納得してもらう形の説明の仕方というのが非常に大事。

- そういった意味で、モデル地区を決定し、見える形にして、成功例を市民に示すというふう理解している。

公共施設マネジメントは、もともと全てをそぎ落とすのではなくて、市民の生活の質を上げるための改革である。そのためには、一方でそぎ落とさないといけないし、一方で機能を多様化しないといけないという、市民の目線でこういうものを見たときに、考え方がもともと本当に行革しないと大変なことになるぞというのは、ある意味そのまま書いてあるので、そうではない、もっと上の部分を出して、それで統合していくやり方をモデル地区で市民に体験してもらうというふう持っていかないと、将来が寂しくなる。

数字だけ見ると本当に大変なことだなと思うが、市民には、将来の北九州市を見据えたときに、何となく不安ばかりというよりも、より豊かな形になる、この施設がなくなって寂しいと思っていたけれども、こういう統合の仕方によって少しでも地域が潤うということ、もう少し見せることができないのかなという気がする。

- 福岡市の児童科学館には、プラネタリウムがあって、そこは児童文化科学館なので、子どものための施設であるが、「福岡市科学館」という形にして、夜間に大人楽しめるようなことを考えているそうである。

今まで児童だけのためだったものが、時間延長するとか、あるいは対象を広げるということで、少し夢のあるような形で進んでいく。

また、民間の力を活用する件については、どこかの施設を市が賃貸で借り受けるような形にすれば、ランニングコストや補修の費用もかからなくなる。

《市》 児童文化科学館、少年の家、青年の家といった所で、やはり「少年の家」という名称では大人が使いにくいとかという声があるため、「自然の家」に変えようとかいった形で、特定の人たちのための施設という印象をなるべく与えずに共有することが、全体としてうまく利用していく1つの鍵になる。

「レディスもじ」と言われると、どうしても男性は使いにくいとか、「勤労青少年ホーム」というと、中高年は使えないのかとなってしまうので、大人も子どもも利用できるようにしていきたいと考えている。

民間の活力については、モデルプロジェクトを推進する門司港地区において、民間の所有地借受けの検討など、その辺も念頭に入れながら、計画づくりを行っている。

- 子どもの利用するキャンプ場や青年の家などについて、「残してほしい」という声があるものの、それらの施設は、利用率が下がってきている。

利用率が低い中で、「残してほしい」といわれても、財政的にはなかなか厳しいものがある。統合するという話もあるとは思いますが、そもそも利用しにくい理由が他に何か

あるのではないか。

低い利用率となっている原因を個別具体的に把握しないと、一般論で「キャンプ場は利用率が低迷しているので廃止します」と言っても、なかなか納得感が得られない気がする。

- 「公共施設マネジメント」は、公共施設をいかにマネジメントするのかというもの。行政が運営すると、「何時までしか利用できない」とか、「人数はここまでしか入れない」とか、いろいろな制約がある。

これを行政的なマネジメントとは異なるやり方をするにより、青少年だけではなくて、年齢層の高い人にも利用してもらおうとか、いろいろな次元の楽しみ方をつくっていくとか、そういった視点も出てくるのではないか。

- 今使っている特定の施設がなくなるということに関しては、利用者は反対のコメントを出す。

その利用者が、例えば門司のモデルプロジェクトの中で、単なる代替ではなく、むしろ多機能な施設になって利便性が良くなったとか、これまでよりも低コストで充実したものができるとか。

少しだけ不便になったけれども、得られるものは大きかったというようなモデルをつくれれば、反対意見は自然と少なくなっていく。

- モデルプロジェクトの案は、素晴らしいと感じる。コストもかなり削減されるだろうし、集約する場所も街中にある。全体を見る限りではよく考えている。

《市》 モデルプロジェクトは、地域ごとの特色をどう強めていくか。同じようなやり方がどの地域でも通用するとは思っていない。

高齢化の進む門司港に関していえば、区役所のある場所が高台にあり、高齢者にとっては、坂を上っていくのがつらいという声も多く聞く。

駅に近接する場所など、交通の結節点に公共施設を集約すれば、会議室やホールなどの利便性が向上する。そういった各地域の特色に応じたアプローチをしていきたい。

- モデルプロジェクトが実現すると、まちのにぎわいも確実にプラスになる。街中に人が流れるなど、動線的にもあそこの場所は素晴らしい。

- このモデルプロジェクトが成功すれば、ここを通して、公共施設のマネジメントが具体的なビジョンとして見えてくるようになる。

- なかなか言葉や文章で説明されてもビジュアル化できない。たくさん文書で書くよりも、実際にどういうふう運営していくのかという具体的なものを見て体験することで、市民の意見も大きく変わってくる。